

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 特 許 公 報 (B2)

(11) 特許番号

特許第4047871号
(P4047871)

(45) 発行日 平成20年2月13日 (2008. 2. 13)

(24) 登録日 平成19年11月30日 (2007. 11. 30)

(51) Int. Cl.

F 1

A 4 3 C 11/12 (2006. 01)

A 4 3 C 11/12

A 4 3 B 23/02 (2006. 01)

A 4 3 B 23/02 1 0 5 Z

A 4 3 B 13/14 (2006. 01)

A 4 3 B 13/14 Z

請求項の数 1 (全 7 頁)

(21) 出願番号 特願2005-130603 (P2005-130603)
 (22) 出願日 平成17年4月27日 (2005. 4. 27)
 (65) 公開番号 特開2006-305016 (P2006-305016A)
 (43) 公開日 平成18年11月9日 (2006. 11. 9)
 審査請求日 平成17年5月6日 (2005. 5. 6)

(73) 特許権者 595013276
 福重 哲治
 兵庫県神戸市垂水区名谷町猿倉301番地
 205
 (74) 代理人 100101085
 弁理士 横井 健至
 (74) 代理人 100134131
 弁理士 横井 知理
 (72) 発明者 福重 哲治
 神戸市垂水区名谷町猿倉301番地205
 審査官 富江 耕太郎

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 甲留めベルトで係合する靴

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項 1】

甲皮が本皮革や合成皮革あるいは布製素材から形成の靴において、土踏まず部の靴底の横幅を当該部分の腰皮の横幅よりも狭小に形成すると共に、靴紐に代わる甲留めベルトの中心部の靴底係止部を当該靴の土踏まず部の本底の上に載置して本底に係合し、載置した甲留めベルトの耐久性及び強度を増すため甲留めベルトの靴底係止部上に中本底を載置して挟持し、さらに中本底の周縁部上に腰皮の下縁部を取り付け、さらにその上に中底を取り付け、さらに中敷きを敷き、上記の本底とその上の中本底との間から靴外部の腰皮外周上に左右の甲留めベルトを延ばし、これら腰皮と独立の腰皮の外周部分の甲留めベルトを伸縮性素材から形成し、さらに甲留めベルトの先端側を非伸縮性素材から形成して腰皮に続く甲皮外周を被って延ばし、その長さを履いた足の甲を被って左右の甲留めベルトの先端に係合しうる長さとし、その左右の甲留めベルトの先端に互いに係合するベルト長さ調整可能な平面ファスナーからなる係合部を有することを特徴とする甲留めベルトで係合する靴。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

この発明は、靴紐のない靴、すなわち靴を履いた時に甲皮を締めるための靴紐の代わりに甲留めベルトで係合する靴に関する。

【背景技術】

【 0 0 0 2 】

従来の靴は、例えば図 6 の断面図に示すように、本底 4 とその上の中底 6 の間に甲皮 2 の側部である腰皮 3 の下端部を接着剤などで係止し、さらに中敷きを敷いた靴 1 からなり、足 1 8 の甲に靴紐などにより締めて脱げないようにしていた。しかし、この従来の靴 1 を足に履いた時に、足 1 8 と靴 1 の腰皮 3 との間に、特に足 1 8 の土踏まずの部分の側部とこの側部に対面する靴 1 の甲皮 2 の側部である腰皮 3 の内面との間に隙間が生じることで、歩行時あるいは運動時に、足 1 8 と靴 1 が一体化し難いものであった。このために、高齢者や肢体不自由者にとっては、靴を履いて歩行し難くなったり、あるいは運動しづらくなり、かつ、足に疲れを覚え、また踵が靴から脱げたりする問題があった。

【 0 0 0 3 】

一方、靴を購入するときは、靴の大きさを足の大きさに合わせる。この場合、一般的には靴の前後の大きさあるいは指部近辺の横幅について合わせ、さらに試し履きをしてみたりする。しかしながら、この試し履きでは靴の細かな形状の差異に基づく履き心地については、直にはわからずに見逃してしまうことが往々にあった。このために購入後の履いているうちに、上記したような足に不具合のあることに気がつくこととなるような問題があった。

【 0 0 0 4 】

従来、甲留めベルトにより足の甲に係止する運動靴などの靴において、履いた靴を脱ぐときに、甲留めベルトの締結を解いて脱ぎやすくし、かつ甲留めベルトの弧状の径を拡げるのみで、甲留めベルトが靴の腰皮の他端側から完全に外れてしまうことのないようにし、しかも肢体不自由者が靴を容易に脱ぐことができ、また、この状態で、再び靴を履き甲留めベルトを締めつけて留めることも容易にできるようにした靴のベルト構造の考案が登録されている（例えば、特許文献 1 参照。）。

【 0 0 0 5 】

【特許文献 1】実用新案登録第 3 0 1 0 3 7 4 号公報

【 0 0 0 6 】

ところで、この考案の靴は上記のように靴のベルト構造、特に甲皮の側部である腰皮の一方の側部に取り付けた甲留めベルトの主ベルトを、腰皮の他の側部に取り付けた折り返し金具保持ベルトに設けた主ベルト折り返し金具に、予め通しておき、主ベルトの折り返し端部の上面側に設けた筒状指掛け部が、主ベルト折り返し金具から抜き去りにくくした構造からなり、肢体不自由者が容易に甲留めベルトを締めつけて留めることができるものである。しかし、この靴は甲留めベルトの締結に主眼をおいているため、甲留めベルトの留め方に工夫はされていても、靴と足とがぴったりと合っているかどうかまでは考慮されていないものであった。

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【 0 0 0 7 】

本発明が解決しようとする課題は、足の土踏まず部の側部と履いた靴の内部の土踏まず部の側部の甲皮である腰皮との間に、靴を履いたときに隙間が生じることによる上記の問題を解消するため、靴を履いた足の土踏まずの部分の側部と靴の腰皮との間に生じる隙間の解消を図り、足の動きと靴の動きを一体化することで歩行時や運動時の足の疲労をなくし、かつ、運動能力を高めることのできる靴を提供することである。

【課題を解決するための手段】

【 0 0 0 8 】

上記の課題を解決するための本発明の手段について説明する。請求項 1 の発明の手段では、甲皮が本皮革や合成皮革あるいは布製素材から形成の靴において、土踏まず部の靴底の横幅を当該部分の腰皮の横幅よりも狭小に形成する。さらに、靴紐に代わる甲留めベルトの中心部の靴底係止部を当該靴の土踏まず部の本底の上に載置して本底に係合し、載置した甲留めベルトの耐久性及び強度を増すために甲留めベルトの靴底係止部上にさらに中本底を載置して挟持する。さらにこの中本底の周縁部上に腰皮の下縁部を取り付け、さら

10

20

30

40

50

にその上に中底を取り付け、さらに中底の上に中敷きを敷く。一方、上記した本底とその上に載置した中本底との間から靴外部の腰皮外周上に左右の甲留めベルトを延在させ、さらに腰皮と独立の腰皮の外周部分の甲留めベルトを伸縮性素材から形成し、さらに甲留めベルトの先端側を非伸縮性素材から形成して腰皮に続く甲皮外周を被って延ばし、その長さを履いた足の甲を被って左右の甲留めベルトの先端に係合しうる長さとし、その左右の甲留めベルトの先端に互いに係合するベルト長さ調整可能な平面ファスナーからなる係合部を配設したことを特徴とする甲留めベルトに係合する靴である。

【発明の効果】

【0009】

本発明の甲留めベルトに係合する靴は、靴底の土踏まず部の横幅を当該部分の甲皮の側部である腰皮の部分の最大横幅よりも狭小に形成し、しかも、この部分の靴底の幅が従来の靴に比してより狭小に形成されており、かつ、その狭小な部分の靴底の本底とその上の中本底との間に甲留めベルトを取り付け、これを腰皮と係止することなく腰皮の外周を独立に包囲して履いた足に甲留めベルトとして係止できるので、甲留めベルトを足の甲に留めるとき、腰皮の土踏まずに対応する部分と足の土踏まず部分の側部との間に隙間を生じること無く係合できる。したがって、靴を足とを一体的に固定でき、その結果、靴の前部を幅広に形成することができ、足の指の部分の幅の余裕が生じる。しかも、靴の前部の幅を広くしても、足が土踏まずの周囲で甲留めベルトにより十分に緊締されているので足指部が前後左右に移動することなく、かつ、足指にゆとりが生じているので、この靴を履いても、たこや魚の目ができにくくまた外反母趾などになりにくい。

【0010】

さらに、上記のように、靴と足を一体的に緊締して固定できるので、子供や老人や肢体不自由者にとって歩き易く、脱げにくいので、歩行中の危険が防止でき、運動能力が高まる。さらに甲留めベルトは足甲を被うベルト長さ調整可能な平面ファスナーからなる係合部を有するので、足の甲のその日の状態、例えば、夕方にむくんだり膨れたりする足の甲の状態に合わせて甲留めベルトの長さを調整して係止できるなど、本発明は従来にない優れた効果を奏するものである。

【発明を実施するための最良の形態】

【0011】

この発明を実施するための最良の実施の形態を図面を参照しながら説明する。図1は本願発明の1例の靴の履いた状態を側部から一部透視して示した側面図である。図2は本発明の靴の請求項1の実施の形態の1実施例の土踏まず部分における断面図である。図3は本発明の請求項1の実施の形態の靴から中本底を省いた参考例の靴の土踏まず部分における断面図である。図4は本発明の靴における土踏まず部分の横幅を説明する図で(a)は従来の靴の横幅で、(b)は本発明の靴の横幅である。図5は本発明における甲留めベルトの展開状態の全体図である。図6は従来の靴の土踏まず部分における断面図である。

【0012】

図1に示すように、本発明の靴1は、足18の甲の上部で靴紐により緊締する靴1と異なり、甲留めベルト11で足18の甲の上で係止する靴1である。この靴1の甲皮2は本皮革や合成皮革あるいは布製素材から形成されている。まず、図4に示すように、靴1の土踏まず部8の横幅9を当該土踏まず部8の甲皮2の側部である腰皮3の横幅10よりも狭小に形成されている。すなわち、この部分の土踏まず部8の横幅9は、図2の(a)に示すように、靴底の方が甲皮2の側部の腰皮3の部分の横幅10よりも狭小に形成されている。このように従来の靴の土踏まず部の横幅がその部分の腰皮の横幅10の幅と略同幅であるのに対し、図4に示すように、本発明における靴は、土踏まず部8の横幅9が、従来の靴の横幅10に比して、狭小に形成されている。

【0013】

さらに、従来の靴の靴紐に代え、本発明における靴1は甲留めベルト11により足18の甲に係止するものとなっている。この甲留めベルト11は、図5に示すように、その素材の中心部12を靴底係止部とし、この甲留めベルト11の中心部12の靴底係止部を当

該靴 1 の上記の横幅 9 に形成の土踏まず部 8 の本底 4 とその上に形成の中本底 5 との間に挿通し、図 2 に示すように、本底 4 と中本底 5 とによりサンドイッチ状に係合する。中本底 5 の周縁部上に甲皮 2 の下縁部すなわち腰皮 3 の下縁部を例えば接着剤により貼着して取り付ける。さらにその上に中底 6 を取り付け、さらに中敷き 7 を敷く。

【 0 0 1 4 】

上記の本底 4 とその上の中本底 5 との間から靴 1 の左右の靴外部に甲留めベルト 1 1 を延在させ、図 5 に示すように、この靴外部に出た甲留めベルト 1 1 を甲皮 2 の側部の腰皮 3 と独立に、腰皮 3 の外側で左右に延在する、例えば糸ゴムを織込んだ帯などからなる伸縮性素材 1 3 から形成する。図 2 の (a) に示すように、この伸縮性素材 1 3 の部分を腰皮 3 の部分を被う長さとし、この伸縮性素材 1 3 の甲皮 2 の側部である腰皮 3 からさらに延びる左右の甲留めベルト 1 1 の先端部を、例えば、非伸縮性素材である甲皮 2 の素材と同じ素材から形成している。この左右の甲留めベルト 1 1 の先端部の長さを、履いた足 1 8 の甲を被って係合可能な長さとし、その甲留めベルト 1 1 の左右の各先端部に互いに係合し合うベルトの長さ調整可能とする平面ファスナー 1 4 と平面ファスナー 1 5 から係合部に形成している。

【 0 0 1 5 】

図 2 の (b) は足 1 8 に、この靴 1 を履いて、甲留めベルト 1 1 の左右の先端の平面ファスナー 1 4 と平面ファスナー 1 5 を係止して足 1 8 の甲を緊締した状態を示す。このように土踏まず部 8 の周囲の甲皮 2 の側部である腰皮 3 を伸縮性素材 1 3 を有する甲留めベルト 1 1 により留めているので、伸縮性素材 1 3 によりより一層に緊締される、かつ、土踏まず部 8 の横幅 9 が従来の靴よりも狭小に形成されているので、腰皮 3 と足 1 8 との間には無駄な隙間は生じることがない。

【 0 0 1 6 】

次いで、本発明の請求項 1 の靴と異なり、中本底を省いた参考例について説明する。この参考例の手段では、請求項 1 の手段の甲留めベルト 1 1 で係合する靴における中本底 5 を省いたものである。本底 4 の周縁部上に甲皮 2 の下縁部すなわち腰皮 3 の下縁部を直接に取り付け、その上に中底 6 を取り付け、さらに中敷き 7 を敷いた構造としている。すなわち、図 3 の (a) に示すように、本底 4 の上の土踏まず部 8 の部分に甲留めベルト 1 1 の中心部 1 2 を載置し、この甲留めベルト 1 1 の中心部 1 2 を載置した本底 4 の周縁部の上に甲皮 2 の側部の下縁部である腰皮 3 の下縁部を取り付け、さらにこの腰皮 3 の下縁部の上に中底 6 を直接に載置する。この本底 4 と中底 6 との間に腰皮 3 の下縁部を取り付けて挟持して係止している。さらに中底 6 の上に中敷き 7 を敷いて参考例の靴 1 の構造とした。この参考例の靴 1 は中本底 5 を有しないが、中底 6 を有して甲留めベルト 1 1 を挟持しているので、この構造でも甲留めベルト 1 1 と腰皮 3 が十分に強力に本底 4 と一体化できている。

【 0 0 1 7 】

図 3 の (b) は足 1 8 に、この参考例の靴 1 を履いて、甲留めベルト 1 1 の左右の先端の平面ファスナー 1 4 と平面ファスナー 1 5 を互いに係止して足 1 8 の甲を緊締した状態を示している。この場合も、上記の実施の形態の靴と同様に、土踏まず部 8 の周囲の甲皮 2 の側部である腰皮 3 を甲留めベルト 1 1 により緊締し、かつ、土踏まず部 8 の横幅 9 が従来の靴より狭小となっているので、腰皮 3 と足 1 8 との間には無駄な隙間が生じることはなく、靴が足に吸いつくように一体化されている。

【 0 0 1 8 】

本発明の靴 1 は、上記のように靴 1 を履いたとき、甲留めベルト 1 1 の左右の先端の平面ファスナー 1 4 と平面ファスナー 1 5 を互いに係合して留めるのみで、十分に足の甲を緊締することができるが、万一の平面ファスナー 1 4 と面ファスナー 1 5 の係合がはずれるような不慮の事故に備えて、図 1 に示すように、甲留めベルト 1 1 の一方と他方の間に紐穴 1 6 を設け、この紐穴 1 6 に補強紐 1 5 を通して結ぶようにすることもできる。

【 図面の簡単な説明 】

【 0 0 1 9 】

【図 1】本願発明の 1 例の中底を有する靴の履いた状態を一部透視して示した側面図である。

【図 2】本発明の靴の請求項 1 の実施の形態の 1 例の土踏まず部分における後方から見た断面図である。

【図 3】参考例の靴の土踏まず部分における後方から見た断面図である。

【図 4】本発明の靴における土踏まず部分の横幅を説明する図で (a) の実線は従来の靴の横幅で、点線及び (b) の実線は本発明の靴の横幅である。

【図 5】本発明における甲留めベルトの展開状態の全体図である。

【図 6】従来の靴の土踏まず部分における後方から見た断面図である。

【符号の説明】

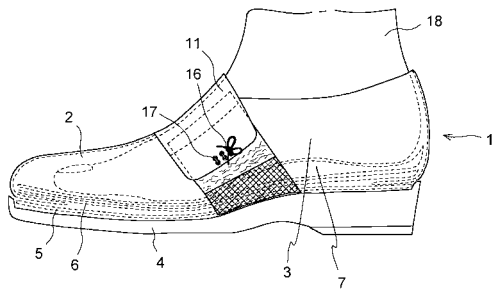
10

【 0 0 2 0 】

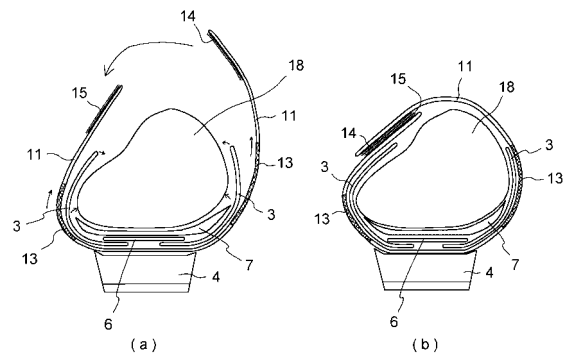
- 1 靴
- 2 甲皮
- 3 腰皮 (甲皮側部)
- 4 本底
- 5 中本底
- 6 中底
- 7 中敷き
- 8 土踏まず部
- 9 横幅
- 1 0 横幅
- 1 1 甲留めベルト
- 1 2 中心部
- 1 3 伸縮素材
- 1 4 平面ファスナー
- 1 5 平面ファスナー
- 1 6 補強紐
- 1 7 紐穴
- 1 8 足

20

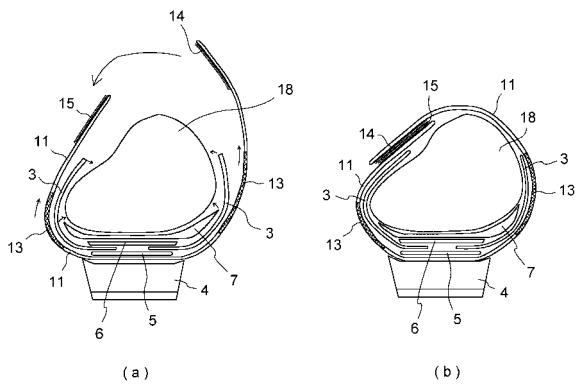
【図 1】



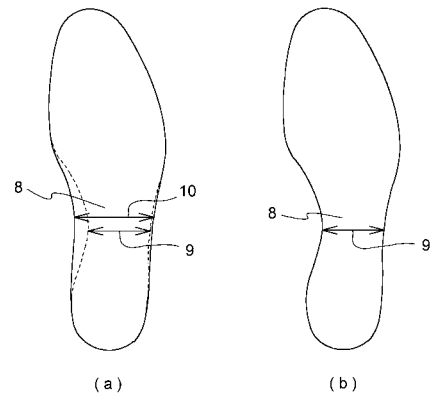
【図 3】



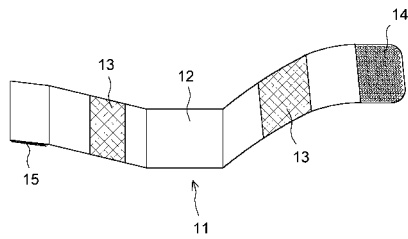
【図 2】



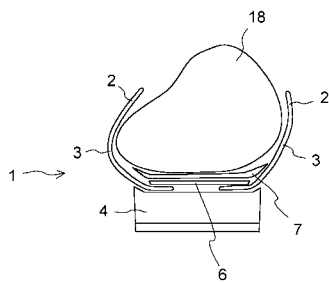
【図 4】



【図 5】



【図 6】



フロントページの続き

- (56)参考文献 特開昭57-209001(JP,A)
特開昭59-64002(JP,A)
実開平2-124008(JP,U)
実開昭63-57910(JP,U)

- (58)調査した分野(Int.Cl., DB名)
A43B1/00 - 23/30
A43C1/00 - 17/06
A43D1/00 - 119/00